

議論が始まった学校防災の在り方…大川小学校の遺族が求めるものは〈宮城〉

2020/02/05 20:14

仙台放送

2月5日、議論が始まった、今後の学校防災の在り方を考える検討会議。震災による津波で、当時大川小学校に通っていた娘を亡くした遺族が、この検討会議に求めるものを聞きました。



議論が始まった学校防災の在り方…大川小学校の遺族が求めるものは〈宮城〉

(仙台放送NEWS)

震災の津波で当時、大川小学校6年生だった娘のみずほさんを亡くした、佐藤敏郎さん。

これまで28年間、学校の教師として子供たちと直接関わってきた佐藤さんが、この検討会議に求めるものは…。

佐藤敏郎さん

「いろんな学校事故とか事件、問題の度にいろいろな会議が立ち上がって提言を出したり指針が発表されたり、調査や研修が増えて机の上で終わってしまって、学校現場がどんどん窮屈になって、先生が忙しくなるということが少なくなかったので、そうならないでほしい」

震災後、学校防災についての会議や検証委員会が数多く設置されました。

しかし、佐藤さんは、その多くが遺族が求める内容ではなく、ぶ厚い資料やマニュアルが作られただけだったと感じたといいます。

佐藤さんは教育現場の現状を知っているからこそ、「先生たちの視点に立った会議にしてほしい」と話します。

佐藤敏郎さん

「学校に教材・副読本・コンクールなんて100個以上来るんですよ。多分さばくので精一杯、さばき切れていないと思いますよ。『防災対策をして、子供の命を守れ』というと、負担にしか思えない。本末転倒ですよ。『忙しくて子供の命が守れない』と言ってはだめでしょ。優先順位をしっかりと決めて、思い切って見直す。やめる」

74人もの子供の命が奪われた大川小学校。

二度と繰り返さないために必要なことは何か、考え抜いてほしいと佐藤さんは訴えます。

佐藤敏郎さん

「方向性、結論ありきではなくて、結果まとまったものにならなくてもいい。学校現場に、子供たちの命に、未来の方向性が示せるものになってほしい」